

花上捕食者相の季節変化

○後藤柚香, 水澤玲子

GOTO Yuka, MIZUSAWA Leiko

福島大学 人間発達文化学類

【キーワード】生物, 送粉, 花上捕食者, クモ

1 はじめに

植物には、花粉の運搬を他の生き物に頼るものが多く、そのため花粉を運搬する送粉者と植物の関係はすでに多くの種で研究されてきた。一方で花上の捕食者に関しての研究は少ない。花上捕食者は、花付近で待ち伏せをして訪花昆虫を捕食する。そのため、花上捕食者の存在は訪花昆虫の行動に影響を与える¹⁾。このことから、花上捕食者は、植物の繁殖に間接的に影響を与えているのではないかと考えられる。本研究では花上捕食者の基礎的な生態情報として、花上捕食者の密度・季節変化を明らかにすることを目的とする。

2 方法

(1) 野外調査

フォレストパークあだたらと小鳥の森において、4月18日から10月15日にかけて、約3週間に1度、以下の調査を行った。

① 植物の開花状況に関する調査

開花している植物の位置情報、種名、開花状況を記録した。開花状況は咲き始め、五分咲き、満開、散り始め、散り終わりの5段階で評価した。

② 花上捕食者の種構成に関する調査

花の周り半径約15cm以内に存在する捕食者を花上捕食者と定義し、見つけた花上捕食者を全て捕獲する。

(2) 解析

① 4月18日から5月30日までの7回の調査について解析した。

3 結果

ここでは、4月18日から5月30日までの7回の調査の結果について報告する。合計で181個体の花上捕食者が記録され、うち93%はクモ類であった。クモ類は全体で9科記録され、そのうちアシナガグモ科、カニグモ科、タナグモ科が上位67%を占めていた。また、季節の進行にともない、クモ類全体の個体数は増加した。

4 考察

花上捕食者としてクモ類が重要であると考えられる。カニグモ科は花との親和性が高いグループとして知られており²⁾、調査結果でもほぼ毎回記録された。しかしカニグモ科だけではなく、アシナガグモ科、タナグモ科などの造網性のクモ類も多く記録され、特にアシナガグモ科はカニグモ科より多い個体数が記録された。以上から、造網性クモ類も送粉者の訪花行動に影響をおよぼす花上捕食者として働いている可能性がある。

今後、6月以降のデータも組み込み統計処理を行い、捕食者による植物の選好性、花の数と捕食者密度の相関、その他の環境要因と捕食者密度の関係など見ていきたい。

5 参考文献

- 1) Yokoi & Fujisaki (2009) 「Hesitation behaviour of hoverflies *Sphaerophoria* spp. to avoid ambush by crab spiders」 *Naturwissenschaften* 96:195-200
- 2) Douglass H. Morse (2007) 『*Predator upon a Flower*』 Harvard University Press.